

ニコラス・ラヴ 『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』：  
月曜日 第五章—第九章<sup>1)</sup>

田 口 まゆみ

Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*: part 2

Mayumi TAGUCHI

**第五章 ヨセフが、我らが母、マリアさまをひそかに離縁しようとしたこと**

我らが聖母さまは夫ヨセフとともに暮らしておられましたが、御子イエスが日に日に母の胎内で大きく成長され、ついにはヨセフの目にもお腹が大きくなってきたのが明白になり、ついついそちらに目が行ってしかたありません。ヨセフは大変悲しみ、心を悩まして、不機嫌に振る舞い、しばしばマリアさまから目をそらさずにはおられませんでした。[N] そして困り果てて、どうすれば一番よいか思案しました。というのが、一方では、彼女の非の打ち所のない清らかな暮らしぶり、表情にも言葉にも行いにも、まったく罪の匂いのないことを見ていましたので、真っ向から彼女の不貞を非難することなどとてもできないのですが、他方、男によって以外に彼女が妊娠することができるとは知る由もありません。[n] そこで密かに彼女を離縁しようと思ったのでした。

福音書に記されたヨセフの賛辞、つまり「夫ヨセフは正しい人であったので」(マタイ、1：19)という言葉はまさにそのとおりで、上の徳高い行いがよく証明しています。一般的に、女の不貞は男にとって最大の恥であり、最大の悲しみ、狂気の沙汰と考えられていたのに、ヨセフは高德にも、自分を抑えて、マリアさまを責めることもしなければ、仕返しをしよう

---

平成16年2月5日 原稿受理  
大阪産業大学 人間環境学部

1) 本稿は『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』第一部「月曜日」の後半訳である。「前書き」と「月曜日」前半訳は大阪産業大学論集人文科学編112号(1-24)に掲載。なお、残念ながら、輪読会が頓座したため、本訳稿は、田口単独の読みに基いていることをお断わりしておきたい。本稿ではラブの加筆部分の始まりを [N]、終わりを [n] で示す。

ともせず、ただじっとその過ちと思われる事に耐え、慈悲の心で自分に打ち勝って、密かに縁を切ろうと考えたのです。(マタイ, 1:19) [N] これは、疑いを募らせるあまり、妻が他の男と愛想良く話をしているのを見ただけで、不貞を働いているのではと邪推するような嫉妬深い男を戒める明白な例話です。[n]<sup>2)</sup>

また、ここでよく注意すると、ヨセフとマリアさまの両者に有益な教えを見ることができます<sup>3)</sup>。わたしたちは、逆境を辛抱強く耐えねばならず、また、神は選ばれた魂に苦難を与え、誘惑を与えられますが、それは彼らにとっての最善を期してのことであり、彼らが褒美を受けるためののだという教えです。というのも、いいですか、この時聖母さまは、夫がそのように悩んでいるのに気がつき、悩みや苦しみがなかったわけではないのです。にもかかわらず、耐えて、おとなしく沈黙を守り、神のすばらしい贈り物のことは心に秘めて、その偉大な神の秘蹟を人々に知らせて、自慢しているとか高ぶっていると思われるようなことを言ったり、話したりするよりは、むしろ、罪深い、悪い、価値の無い者であると思われる方を選ばれたのです<sup>4)</sup>。

しかしこの時彼女は神に祈って、対策を講じてもらえるよう、もし神の意志にかなうなら、彼女と夫から、この困難、この苦しみを取り除いてもらえるよう祈りました。そこで、辛抱強く、またすべての事象が最善になるようお命じになる我が主は、二人をなぐさめるために天使をおつかわしになりました。天使が、ヨセフの夢に現れて言ったのです。

「恐れず妻マリアを迎え入れ、信じて喜びともに暮らさなさい。マリアの胎内の子は男によってではなく、聖霊によって宿ったのである。」(マタイ, 1:20)

大変悩んだヨセフでしたが、この天使のお告げを聞き、大いに喜び、安堵したのです。

わたしたちも、同じように忍耐しましょう。逆境の時に忍耐することができれば、主なる神は、嵐の後に柔らかな陽気な天候を送ってくれます。益するところがないのに、選ばれた者たちを誘惑にさらすようなことは絶対なさいません<sup>5)</sup>。

この啓示の後、ヨセフは聖母さまにすばらしいご懐妊について尋ねました。マリアさまは、その時のことを順を追って、どのように起こったか、喜んで話しました。そうしてヨセフは、恵まれた方、妻マリアさまと喜ばしく暮らし、彼女を支え、清らかな真の愛で語りつくせないほど激しくマリアさまを愛し、何事につけてもこまごまとマリアさまへの気配りを忘れませんでした。聖母さまも、これに応じてヨセフを信頼し、共に暮らしました。二人の暮らし

---

2) Marginal annotation : Nota contra zelotipos.

3) Marginal annotation : nota De tribulacione patienter sustinenda.

4) Marginal annotation : Nota humilitatem Marie.

5) Marginal annotation : Nota de patientia.

は大変貧しかったけれど、魂の喜びは大変大きかったのです。

一方我らが主イエスは、隠修士のように、他の子供と同様九ヶ月の間母の胎内に閉じ込められ、じっと我慢し、おとなしく耐え、誕生の時を待っておられました<sup>5)</sup>。

主なる神よ、イエスがわたしたちのために、そこまで深い従順へと身をかがめてくださったことにお応えして、わたしたちは、どれほどこのお気持ちを分かち合うことができるでしょうか<sup>6)</sup>。わたしたちは、従順の徳を強く願ひ、愛さなければなりません。そのように力ある天の主が、そこまでご自分を低められたということをよくよく考えてみるならば、わたしたちも決してつまらない自尊心、世間の評判に思上がるということがないでしょう<sup>7)</sup>。わたしたちのためにそれほど長い間身をお隠しになるという、この恩恵一つに対してさえ、ふさわしい、立派なことができませんし、埋め合わせもできません。しかしながら、このことが真実だと確かに心に刻み、全霊を傾けて、敬虔に、イエスに感謝を捧げます。特に神の道に入ったわたしたちは、イエスがわたしたちを他の者たちから離し、世間から遠ざけてくださるよう祈りましょう<sup>8)</sup>。というのも、微小ではあろうとも、このこと、つまり神へのご奉仕のために隠修の生活に研鑽を積むことで、わたしたちはイエスに幾分かのお返しをしているからです。ほんとうに、これこそイエスの恩恵であり、わたしたちの砂漠ではありません。これこそ偉大な尊い恩恵であり、わたしたちが苦しみを求めて隠修するのではなく、安全を求めて隠修するという点において尊いのです。なぜならば、いわば高い堅固な宗教という塔に身を置いているからには、邪悪な世間の毒矢も、あの過酷な海に荒れ狂う嵐も寄せ付けはしないのであり、敵はただ、我々の足りない点、愚かな点にのみあるからです。

[N] しかし魂を閉じ込めることができなければ、身体のみ閉じ込めても、ほとんど、あるいは全く意味はありません。ですから、もしあなたが独立したあるいは回廊の独居室に身体を封じているならば、どうぞ、魂をイエスとともに心の中に封じ込めなさい。まず、イエスのように、自分は無価値なものであると考えなさい。そうして、完璧な従順から、子供のようになりなさい。また、沈黙を守り、愛し、必要な時と神の教えを説く時以外は口をきいてはなりません。さらに、生まれる前、つまり完全な言葉や意見によって外界に自らの姿を示す前に、九ヶ月の期間をおかなければなりません。その間は、あなたの徳と神の律法の理解が完全に根付いていないからです。神の十戒の十という数が神の律法の完全のしるし、すなわち、それ以下は、不完全のしるしだからです。

---

6) Marginal annotation : Nota.

7) Marginal annotation : Nota de humilitate.

8) Marginal annotation : Nota.

9) Marginal annotation : Nota pro reclusis & religiosis. & caue.

自然の時が満ちる前に生まれる子供が元気に育たないように、内的に完全に徳が育ち形成される前に、清く完璧な言葉や行為で外界に存在を示そうとする人は、誘惑に直面した時に魂の力が足りず、他の人や自分自身の益になるように持ちこたえることができません。ですから、私たちの心をこの世の虚栄と欲から引き離して、内なる力の中へと閉じ込め引きこもり、わたしたちのために聖母マリアさまの胎内に喜んで引きこもられた我らが主イエスに倣って、心の清純に専心しましょう。[n]

また、同情の心と、この世の償罪の苦行と困難をイエスとともに耐える心をかき立てるために、イエスが母の胎内に入られた最初の時から亡くなる最後の時まで絶え間ない苦しみを受けておられたことを考え、忘れないようにする必要があります。特に、そして第一に、イエスは、罪深い人々が偶像崇拜や不信心のために、この上なく愛する天の父を崇めず、捨てていることを知っておられたために苦しみました。また、皮肉にも神の似姿に造られていながら、大方は地獄に落ちる呪われた運命である魂に、イエスは心から同情し、身体に受けた磔刑の受難や死よりもつらいと思われたのです。ですから、不信心を駆逐し、この呪いを打ち壊すために、イエスはあのような死に方、あの受難に甘んじられたのです。

[N] ですから、イエスを心から愛する者たちは皆、イエスを信じない者、異教徒たち、そして彼らの呪われた運命に対してばかりでなく、いやそれ以上に、罪深い暮らしをしている不実なキリスト教徒に対して同情し、魂で悲しむべきです。この世の財が失われること、あるいはご自分の肉体的死にもまして、ひとりの人の魂が死を招く罪によって失われるのを知り、見ることが、イエスにとってより大きな受難であり、魂にとっての病であったと同じように。なぜなら、それこそ完全な慈愛を要することだからです。

このように、ここでの話から有益な教えとすばらしい例を得ることができます<sup>10)</sup>。まず我らが尊い主イエスから、完璧な慈愛と真の同情から行われた償罪の苦行について。また、聖母マリアさまの、逆境における奥深い従順と忍耐について。そしてその夫ヨセフからは、誤った疑いに負けない、徳高い正しさについてです。

もし、なぜ、何のために聖母さまがヨセフと結婚したのか—ヨセフはマリアさまと肉体的関係は無く、マリアさまはずっと清らかな処女のままでしたから—ということを知りたければ、これには三つの理由があげられます<sup>11)</sup>。第一に肉体労働に疲れた時に、彼女にお仕えする者、また、彼女の清らかな純潔を証明する男性のなぐさめと安らぎが必要だったからです。第二の理由は、神の御子のご出産は、悪魔に知られないように隠し、秘密にされなければならなかったからです。第三は、聖母さまに不貞の汚名をさせてはならなかったからです。律

---

10) Marginal annotation : Nota vtilitatem precedencium.

11) Marginal annotation : Quare virgo Maria fuit desponsata Joseph.

法では、死に値する罪で、ユダヤ人に石をぶつけて殺されたでしょう。

以上が本巻の第1部となっています。月曜日と、御降臨から御聖誕までの期間の、黙想のお役に立ちますように。我らが主イエスの名が、聖母マリアさまの名とともに永遠に尊ばれますように。アーメン。[n]

## 第六章 我らが主イエスの誕生について

尊いイエスの受胎から九ヶ月が終わりに近づいたころ、ローマ皇帝アウグストゥスが、彼に属する全領土について登録をするように、勅令の触れを出しました。ローマ帝国に属する各地域、都市、そしてそこに住む人々の数を知ろうというのでした。これにしたがって、すべての臣民に、その時住んでいた場所にかかわりなく、自分が生まれた町、先祖代々の土地に帰るよう命じました。そこで、ベツレヘムのダビデの家の血筋であるヨセフも、当時臨月を控えていた尊い妻マリアさまを伴って、他の者たち同様皇帝の臣民として登録をするために、ナザレからベツレヘムへと向かいました。そういうわけで、ヨセフとマリアさまは、一頭の牡牛とロバを引いて、その二頭の家畜以外は一切この世の財を持たない貧しい民として、その長い道のりを二人で行きました。ベツレヘムに着くと、そこは同じ目的で集まった人々であふれかえていたので、どこにも宿を見つけることができず、二軒の家の間の、屋根のある雨宿りの場所を宿にして、ずっとそこに滞在せざるを得ませんでした。ヨセフは大工だったので、そこに自分たちを隠す囲いと、家畜の飼葉桶を作りました。

さあ、ここで、よく注意して、その時の聖母マリアさまのご様子を想像し、お気持ちになってみて欲しいのです。そのように若くて幼く、つまり15歳でありながら出産を間近に控えた身重で、60と10マイルあるいはそれ以上の長い道のりを、そのような貧しさで旅し、しかもベツレヘムの町に来てみれば、休息が必要であるのに、見知らぬ人々の中で腰を低くして宿を頼んでも、頼む端から断られ、追い返され、とうとう仕方なく、先に述べた空き地に宿を取ったのです。

しかし、今、イエスの尊いご誕生と、聖母マリアさまの清らかで聖なる出産について、[N]ある敬虔な者に示された聖母さまについての啓示に一部書かれているとおり [n] お話しを加えたいと思います。尊い出産の時、つまりその日曜日の真夜中になると、男の種無しに、聖霊によって母の胎内に入られた天の神の御子は、苦しんだり泣いたりすることもなく、胎内から突然、母の足元高くに出でいらっしやいました。すぐに聖母さまは、敬虔に、この上ない喜びに満ちて身をかがめ、御子を取り上げると、優しく抱きしめくちづけをして御子を膝に抱き、胸も良く張ってきていたので、聖霊に教えられたとおり、甘い乳で御子をきれいに洗い、頭に巻いていたスカーフで包み、飼葉桶の中に寝かせました。すぐさま、牡牛と

ロバが膝を折り、飼い葉桶に口を寄せ、御子に鼻から息を吹きかけました。そのように寒い季節に、そのように簡単に包まれただけの赤子は、そのように暖めてやらなければならないとよくわかっていたからでした。それから母は、跪いて神を讃え、愛し、心の中で神に感謝してこのように言いました。

「主なる神、天の父よ、全霊でお礼申し上げます。わたしに大切な御子をくださいました。全能の神、神のそしてわたしの御子を、讃えます。」

ヨセフもまた、神であり人である御子を讃え、拝み、ロバから鞍をはずして、聖母さまがお座りになり寄り掛かることができるように据えました。そうして世界の聖母さまは、そのような質素ないでたちで飼い葉桶の傍らに座り、優しさにあふれ、愛に満ちたまなごしで、心から愛情をこめ、いとおいしい、大切な御子を見つめたのでした。

[N] しかし、このように貧しく簡素なこの世の装いでありながら、どのようにすばらしい霊的な豊かさ、心の安らぎと喜びを聖母さまが味わわれたかは筆舌に尽くせません。ですから、もしわたしたちがイエスの真の喜びと慰めを感じたいと願うならば、この御生誕、第一の降臨においてイエスが示された例に倣って、イエスとそして聖母さまとともに、清貧、従順、肉体の苦行を愛さねばなりません。[n]

第一の清貧については、聖ベルナルドゥスが、我らが主の御生誕についての説教で、主が人類に慰めを与えるためにどのようにお生まれになったかを語り、次のように述べています<sup>12)</sup>。

子なる神は、主の民を慰めたまいます。主の民とは、誰か知っていますか？それは、ダビデが詩篇で、「主よ、貧しい人はあなたにすべてをおまかせします。」(詩篇、10：14)と語っている者のことです。また、主ご自身が、福音書で「富んでいるあなたがたは、不幸である、あなたがたはもう慰めを受けている。」(ルカ、6：24)と言っておられます。この世で自分の慰めを受けている人を、どうして主が慰めなくてはならないでしょうか？ですからキリストの無垢な子供の姿は芸人や演説氏を慰めず、キリストの涙はむやみに笑う者を慰めません。主の簡素な衣服は奢った服装をする者を慰めず、主の厩や飼い葉桶は上座や世俗の名誉を愛する者を慰めないのです。また、天使が、キリストの御生誕に際し、寝ずの番をしていた羊飼いに現れ、他ならぬ貧しい労働者を慰めて新しい光の喜びを伝えましたが、この世で喜び、慰めを持つ豊かな者たちに現れたものではありません。

また第二の点に関しては、このキリストご聖誕の折のキリストと聖母さまの両方に完璧な従順を見ることができま<sup>13)</sup>。なぜなら、お二人は厩にも家畜にも馬草にも怖じることなく、

---

12) Marginal annotation: primum De paupertate Bernardus sermone v<sup>10</sup> de natiuitate ('In Nativitate Domini Sermo V', PL 183 : 130.)

13) Marginal annotation: 2<sup>m</sup> De humilitate.

さらに他にも卑しく粗末であることを求められたのです。しかも我らが主と聖母さまは、この従順の徳をあらゆる行いにおいて貫徹され、わたしたちにも至上の徳としてお勧めになるのです。ですから、全力を投じてこの徳を手に入れるよう努力しましょう。この従順の徳がなければ救済は受けられないのです。どのような仕事も行いも、傲慢に行ったのでは決して神はお喜びになりません。

また、第三の点についても、お二人、特に幼少の御子イエスに少なからぬ肉体の苦行の例を見ることができます<sup>14)</sup>。このことについては、聖ベルナルドゥスが次のように語っています<sup>15)</sup>。

御子は、お生まれになる時期を自由にお選びになることができたわけですが、敢えて、特に赤子にとって、貧しい女の子供にとって、最も厄介で困難な時期、極寒の冬をお選びになりました。母は赤子を包む布にも事欠き、飼い葉桶を揺りかご代わりにして御子を寝かせました。毛皮の、あるいは毛皮をあしらった衣がぜひとも入用だったのに、そのような記述は見つかりません。キリストは誤ることなく、肉体にとって最もつらいこと、すなわち最上のこと、最も益あることを選択し、選ばれた者となることを選択されたのです。違うことを教えたり命じたりする者は、まやかしの嘘つきです。そのような者からは逃げ去りなさい。

このように聖ベルナルドゥスは言ったのです。これらの徳については、ここではこれくらいにしておきます。

キリストの尊いご生誕についてさらに語りましょう。そのように我らが主がお生まれになった時、彼らの主である神を敬い、崇めるためにそこに集まっていた大勢の天使たちが、すぐさま、バツレヘムから1マイルばかりの近くにいた羊飼いの元へ行き、救世主の誕生とその場所を知らせました。天使の一人、多分この御仕業の特別な使者であるガブリエルが、光に包まれて羊飼いに現れたのでした。同時に大勢の天使たちが声を合わせて、あの新しい喜びの歌を歌いだしたのです。福音書によれば、このような歌でした。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」(ルカ、2:14)

天使たちは、このように喜びの歌を歌いつつ、歓喜に満ちて天に昇り、道中仲間の天使たちに主の尊い御誕生の、この喜ばしい知らせを伝えたのです。この知らせに天の宮廷は言葉では表しきれない、また想像もできない喜びにあふれ、わたしたちが敬虔に考え、想像できるように、厳粛に宴を催し、父である全能の神に敬虔に感謝を捧げました。そして全員が階級に従って順に、主である子なる神の美しいお顔を拝みに訪れ、恭しく御子と聖母さまを拝

---

14) Marginal annotation : 3<sup>m</sup> Corporalis afflictio.

15) Marginal annotation : bernardus sermone 2<sup>o</sup> de natiuitate ('In Nativitate Domini Sermo III', PL 183 : 122-23.)

したのでした。

これについて、聖パウロは、ヘブライ人への書簡で「神はその長子をこの世界に送るとき、『神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ』と言われました。」（ヘブライ人への手紙、1：6）と書いています。

一方羊飼いたちは、天使たちが行ってしまうとこの子を拝みにやってくる、天使たちから聞いたことをはっきりと告げました。聖母さまは、この上なく賢く才知に長けていたので、起こったことすべてに思いをめぐらした上で、彼女の尊い息子について語られた言葉を残らず、密かに心の中に納めたのでした。

以上このように、我らが主イエスの尊いご生誕の経緯について観想することができます。

さらにこの祝い、この祝日の荘厳さ、尊さについて、心に刻みましょう。これぞ至福の王の誕生、全能の神の御子、[N] 君主の中の君主、全世界の創造主であり統治者——お名前を特に平和の王と呼ばれますのは、すでに受肉の章に書いてあるように、あの偉大な終わらなき平和がこの方によってつくられたからです。ですからこの日、天使たちが、前に述べたように、あの喜びの歌を歌うのです。

「いと高きところには栄光、神にあれ、……」（ルカ、2：14）[n]

この日、聖教会はミサで、イザヤの予言にしたがって、歌います。

「ひとりのみどり児がわたしたちのために生まれた。その方はわたしたちのように人である。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。天の父と同じく神であらせられる。」（イザヤ、9：6）

またこの日、初め雲に隠れていた正義の太陽が堂々と慈悲の光線と恵みの光を全世界に発散し、この日あの尊い新しい姿、これまでこの世で見られたことのなかった、つまり人となられた全能の神の姿が現れたのです。

またこの日、自然の法則、あらゆる人知を超えたあの二つの偉大な奇跡が起こりました。それは真の信仰によってのみ想像することができます。つまり、神がこの世にお生まれになったこと、<sup>おとめ</sup>処女が、悲しみなく、処女を汚すことなく、子供を生んだこと、の二つです。ですからこの日、聖母さまは、前に語られたこと、受胎告知を受けた時に天使が言ったこと、約束したことが確かに行われたことを感じ、あの第二の至上の喜びを得たのでした。ですからこの日は、先に受肉の祝日について述べたとおり、全人類にとって大変喜ばしい日であり、全能の神とその尊い母君マリアさまの大祝祭なのです。なぜならそこで語られた道理がすべて実行に入り、ここに、より明らかに成就されたからです。

自然に背いたこのすばらしい誕生の印、証として、ローマではその日、ある酒場で油井が噴出し、同じ街で、黄金の像と、処女が男の子を産むまでは決して倒れないと予言されたた



め、永遠の平和の神殿と呼ばれた神殿が、キリストがお生まれになった瞬間に一緒に倒れました。その場所には、今、聖母マリアさまをお祭りする聖教会が建っています。聖母さまと尊い御子、我らが主イエスの御名が永遠に讃えられますように。アーメン。

## 第七章 我らが主イエスの割礼について

御子がお生まれになって八日目に、律法に従って御子に割礼が施されました。そしてこの日、敬虔に心に留めておくべき二つの偉大なことが行われました。

第一は、尊いイエスというお名前がこの日公に発表され、お名前となったことです<sup>16)</sup>。これは初めから天の父なる神によってつけられた名前前で、胎内に宿られる前に、天使ガブリエルが宣言し、告げていたものです。それで御子はイエス、すなわち「救い主」と特別に呼ばれるのであり、この名前は当然あらゆる名前にまさる名前です。使徒ペトロが言うように、「わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名の他にない」（使徒言行録、4：12）のですから。

[N] このお名前と、これにまつわる尊い意味と美德について、聖ベルナルドゥスが順序だてて解説していますので、後で紹介することにします。[n]<sup>17)</sup>

心に刻むに値する、この日行われた第二の事とは、我らが主イエスがこの日わたしたちのために尊い血を流し始められたということです<sup>18)</sup>。お生まれになってすぐに、イエス、罪を知らないイエスの、わたしたちのための苦しみが始まりました。この日、わたしたちの罪のためにその甘美な柔らかい御身に痛みを負い始められたのです。

わたしたちは大いに涙を流し、イエスに同情しなければなりません。主はこの日、大変激しく泣かれたからです。ですからこれらの大祝祭、儀式では盛大に賑やかにして、わたしたちの癒しを喜び、同時に心では、わたしたちのためにイエスが耐えてくださった痛み苦しみに同情し悲しまなければなりません。なぜなら、前にも述べたように、イエスはこの日、御血を流されたからです。律法の儀式に従って、柔らかな肉が鋭い石のナイフで切り裂かれ、みどり児イエスは、当然のことながら御身に感じた痛みのために泣かれたのです。間違いなくイエスは、他の子供同様痛みを感じるまことの肉体を持っておられたからです。主の痛みを分かつべきではないでしょうか？そう、本当に、聖母さまのお苦しみにしても、同じ心を目指さなければなりません。愛しい御子が泣かれるのをご覧になって、聖母さまも涙をこらえることがおできにならなかったことは想像に難くありません。そこで、心に思い描いて

---

16) Marginal annotation : primum.

17) Marginal annotation : bernardus super cantica.

18) Marginal annotation : secundum.

みてください。母の膝に抱かれた幼子が、母が泣くのを、泣かないでというようにその小さな手を母の頬に伸ばします。母はこれに心を動かされて、愛しい息子の痛みと涙に心を痛め、口付けしながら、話しかけながら、何とかあやそうとします。なぜなら、御子は言葉にされないのに、聖母さまは御子のお気持ちを、聖霊の力によってよく理解されたからです。そこで、聖母さまはおっしゃいました。

「愛しい息子よ、わたしに泣くのをやめて欲しいのなら、あなたも泣くのをおやめなさい。あなたが泣くのを見ていると、母も泣かずにはいられません。」

そうして、母が共に泣いたために御子はぐずぐず泣くことをおやめになりました。そこで母は、幼子の顔を拭き、口付けして、乳をふくませ、できる限りに慰めました。そうして、御子が泣くたびに繰り返したのです。というのも、想像できるように、御子も他の子と同じように再々泣かれたからです。それは卑しい人の姿にまことに入られたことを示すためであり、また、悪魔から、神であることを知られないように身を隠すためでした<sup>19)</sup>。

[N] ここでは、我らが主イエスの割礼についてはこれくらいで十分でしょう。[n]

しかし、神の恵みにより、古い律法のこの割礼の儀式は行われなくなり、代わりにキリストによって定められた洗礼の儀式があります。これはさらに恵みの深い秘蹟であり、痛みも少ないのです。肉体の割礼を行わずに、魂の割礼を受けるのであり、それは罪にさらされたすべての表面的なものを切り去り、徳高い生活に必要なもののみを大切に保持することです。真に貧しい者は、徳高い割礼を受けているのであり、この割礼について、使徒パウロは、「食べる物と着る物があれば、わたしたちはそれで満足すべきです。」(テモテ1 6:8)と、教えています。

この魂の割礼は、また、わたしたちの感覚、すなわち見る、聞く、触れる等ののすべてに行われるべきで、わたしたちはこれらのすべてにおいて過剰を避け、最小限に保つべきです。つまり、話すことについては、実のない多弁は大変な悪徳で、神にも善い人にも好まれず、定まらない、放埒な心の証であり、これに反し、沈黙は大きな美德で、善の源として教会法で定められているのです。この美德についてはさまざまな学者が語っていますが、今ここでは割愛して、この章を終えます。

## 第八章 我らが主が公にお姿を現された顕現日について

まず、この厳粛な日、尊い祝祭について、聖教会にこれほどさまざまな儀式がある祝祭もないということを理解するべきです。他の祝祭よりも大切だというわけではなく、この日特

---

19) Marginal annotation : cause ploratus Christi.

に、聖教会の立場について多くの重要なことが起こり、行われたからです。

第一に理解しておかなくてはならないことは、この地上における聖教会は二種類の人から成り立っているということです<sup>20)</sup>。ひとつは、モーゼの律法を掲げ、割礼を受けたユダヤ人に発する人たちで、もう一方は、その他の割礼をしない、異教徒と呼ばれる人たちです。この日、[N] つまり聖誕祭からその日を含めて数えて13日目に [n]、御子イエスが神であり人である者として、特に異教徒の王たちの前に公現されました。そして彼らを代表として、聖教会はこの時、集まった元異教徒の大群に洗礼を施し、この日彼らは、神によって真の信仰を受け入れられ、認められたのです。生誕の際にキリストは、羊飼いたちを代表とするユダヤ人の前にも特に姿をおあらわしになりましたが、ユダヤ人たちは、大方、神の言葉、信仰を受け入れませんでした。しかしこの日イエスは異教徒の前に姿をおあらわしになったのです。わたしたちはその異教徒の子孫、いまやイエスに選ばれた聖教会です。ですからこの祝祭は、特に、また正当に、真のキリスト教徒の聖教会の祝祭なのです。

聖教会に関連してこの日行われた第二の事は、29年後のこの日キリストが受けた洗礼によって、聖教会がキリストの魂の花嫁となり、真にキリストと結ばれたということです<sup>21)</sup>。なぜなら、洗礼によって魂はキリストと婚姻を結び、キリスト教徒の魂の集會が聖教会と呼ばれるからです。洗礼によって罪の汚れは洗い流され、清められ、新たに徳の衣を着るのです。

第三の事は、十二ヶ月後の同じ日、つまりイエスが洗礼を受けられてから一年後、イエスが婚礼の席で水をワインに変え、初めて奇跡を働かれたことです<sup>22)</sup>。これは聖教会の靈的婚姻を表すと解釈されます。

この日起こった第四の事は、[N] 祈りにあるように [n]、さらに一年後のこの日、イエスがわずかのパンとわずかの魚で群集の腹を満たしたという奇跡を指します<sup>23)</sup>。しかし、最初の三例は聖教会でこの日語られますが、第四の例は語られません。

何とすばらしい日なのでしょう。我らが主なる神は、特にこの日を選んで、そのように多くの偉大なすばらしいことをなさったのです。ですから聖教会は、靈的な夫であるイエス・キリストによってこの日聖教会に施された数々の恩恵に鑑み、この日を、ふさわしく盛大に、厳粛に祝うのです<sup>24)</sup>。

とはいえ、この日の第一の、最も特別な祝いの意味は、第一の点、すなわち王たちがイエ

---

20) Marginal annotation : primum factum.

21) Marginal annotation : 2<sup>m</sup> factum.

22) Marginal annotation : 3<sup>m</sup> factum.

23) Marginal annotation : 4<sup>m</sup> factum.

24) Marginal annotation : Contemplatio.

スを崇め、贈り物をしたというところにあります。[N] ですから、ここではその他の事はこれ以上触れないことにし、この点について観想を深めましょう。[n]

それでは、この事がベツレヘムで起こったその場にいるようなつもりで想像し、心と思考を集中させてみましょう。三人の王が大勢の供を引き連れてやってきます。堂々たる諸侯やその召使たちの一行です。星が先に立って導いて、幼子イエスがいらっしやったその場所の上に止まって示しましたので、彼らは、イエスがお生まれになった、厩のようなその粗末な家の前で、乗っていたラクダから降りました。その時聖母さまは、その音、大勢の人のざわめきを聞きつけ、あわてて幼子を胸に抱きかかえました。王たちはその家に入り、その子を見るや否や、跪いて恭しく敬虔にイエスを王と讃え、神と拝んだのでした。神よ、そのように粗末な布にくるまれたひとりの幼子が貧しい母とともに、そのようなみすぼらしい場所で他に人もなく、召使もなく、なんらこの世の飾りもなしにおられるのを見て、真の神、世界の王、君主であると拝むとは、彼らの信仰、信心のなんと偉大で真摯であったことでしょうか。そのような貧しさにもかかわらず、彼らはお二人のことを心から信じたのです。そのような先達、そのような信仰の創始者をお定めになるとは、これぞ我らが主である神の行われた偉大な善。また、そうでなければならなかったのです。

さらにこの経緯について、王たちが御子をまず崇めた後で聖母さまに話しかけた様子を想像してみましょう。彼らは恭しく、御子の様子を尋ね、どのように胎内に入れ、誕生されたのか、その他彼らが知りたいと思ったことについて聞きました。聖母さまは、優しく答えて、必要なことを全て話して差し上げ、王たちは聖母さまが語られたことを全て心から信じたのでした。彼らは学者であり、知恵に長けた人たちでしたので、きっとヘブライ語を知っていて、聖母さまとユダヤの民の母語を話すことができたのだと思ってよいでしょう。

さてここで、双方の話し振りについてよく考えて見ましょう。まず、王たちが、恭しく丁寧に話し、聖母さまに質問をします。他方、聖母さまは、気高くも恥じらいといった様子で、地に目を落としたまま、質問に対し真摯に、また短く語り、お答えになります。というのも聖母さまは、多くを語ることも、見られることも好まれないからです。しかし、我らが主が彼女に力をお与えになり、王たちにもっと親しく話すよう特別に元気づけられました。なぜなら、彼らは、前にも述べましたように、その時異教徒から発することになっていた聖教会を代表する人たちだったからです。

また、御子の様子を見てください。御子は語られませんが、まじめなお顔で、機嫌よく、彼らが誰かを理解して、愛らしい様子で彼らをご覧になっています。そして王たちは、啓示によって教えられた、御子の、神としての霊的な姿にばかりではなく、外見の、生身のお姿を大変好ましく思いました。というのもダビデが証言するように、イエスは「人の子らのだ

れよりも美しく」(詩篇, 44: 3) ていらしたからです。

そのように王たちは御子に大いに慰められて、多分このように贈り物を捧げたのではないのでしょうか。宝の箱を開けると、綴れ織りか何かの布を、御子、我らが主イエスの足元に広げ、それぞれの王がそこに贈り物——黄金と乳香と没薬——を並べ、捧げました。黄金はたくさんあったに違いありません。贈り物が少しならば、福音書にあるように「宝の箱を開ける」必要はなく、施物官か宝物官が簡単に手に持つなりして運んだでしょうから。このような理由で、贈り物は量も多かったと思われます。そうして贈り物を御子の前に並べて捧げた後、王たちは恭しく、また敬虔にひれ伏して、御子の足にくちづけをしたのでした。また、御子は、知恵にあふれておられたので、彼らをさらに慰め、御子への愛を強めるために、彼らがくちづけするように手を差し出され、これによって祝福されました。王たちは恭しく身を折って、聖母さまとヨセフに別れの挨拶をすると、大いに喜びに満たされて、福音書にあるとおり、別の道を通して自分たちの国へ帰って行きました。(マタイ, 2: 12)

[N] これらの王たちが捧げた贈り物が霊的に何を意味するか、また、この出来事についてその他福音書にさらに書かれていることについては、聖なる学者たちによって説明され、十分に、また完全に多くの書物に書かれているので、ここでは割愛することにします。[n]

しかし、その高価な黄金の贈り物で、わたしたちはどんな希望を与えられたのでしょうか<sup>25)</sup>。聖母さまはそれを宝としてしまっておかれたのでしょうか、それともそれで土地や収益物件でも買われたのでしょうか。いえ、いえ、神よ禁じたまえ。聖母さまは清貧を完璧に愛する方でしたから、そのような世俗的な物には見向きもされませんでした。それでは、どうされたのでしょうか。聖母さま自らも清貧を愛されたばかりでなく、御子が、内的には、聖母さまの心の中に教えを吹き込み、外的には、御子がそのような富を愛さないということを、その宝からしばしば顔をそむけたり、つばを吐きかけたりして印をお見せになったので、尊い御子のお気持ちをよく理解され、数日の短期間のうちに、すべて貧しい人々に分け与えてしまわれました。短い間でも、その宝を手元においておくことは、聖母さまにとって大変な負担、重荷だったのです。それはよいことに思えました。聖母さまは、すっかり金品を捨ててしまったので、清めを受けるために神殿に行こうとした時に、御子のための捧げ物の子羊を買うことができず、貧しい人の捧げ物として律法に定められた、価値の低い山鳩か家鳩かを買ったきりでした。ですからわたしたちは、王たちの贈り物はすばらしく高価であったが、聖母さまは、貧しさを愛し、慈愛に満ちていらしたので、急いでそれを貧しい人たちに与えてしまわれたと言われていることを、十分信じることができます。ですから、ここには、清

---

25) Marginal annotation : Nota de paupertate.

貧の、賞賛すべき、すばらしい例が示されているのです。

また、これを注意深く見るならば、完璧な従順の明白な例を見ることができます<sup>26)</sup>。なぜなら、心の中で自分のことを低く、卑しく思い、自分では、傲慢によって増長してはいないと思っている者はたくさんいても、彼らも他の人の目にはそのように見られたくはなく、軽蔑されたり嘲笑されたりすることには耐えられず、他人から軽蔑されたり責められたりしないように、自分の低さや欠点が知られないように望むものなのです。しかし、この日、万民の主である御子イエスは、そのようにはなさらなかったのです。むしろ御子は、ご自分の低さ、惨めさがそちこちに知られ、目に触れるようにされました。しかも身分の低い少数にではなく、偉大な多くの人、つまり、王とか諸侯とか、その多くの家来たちなどです<sup>27)</sup>。当然大いに慎重になってもよい状況と場合であったことを考えると、なおさら驚嘆に値します。つまり、そのように遠くからやってきて、ユダヤ人の王と求め、全能の神と信じた御子が、そのように粗末ななりで、そのように惨めな状況で横になっておられるのを見出し、その粗末な光景に、自分たちは騙された、何と愚か者であろうかと、御子を拝むこともなく信じることもなく去ってしまうという恐れもあったのですから。しかし、だからといって、従順を極め、清貧を愛する御子はその完遂を断念されることはなく、わたしたちに模範を示されました<sup>28)</sup>。見かけの益や善にまどわされて、まことの従順の地盤から離れてはならず、他者の目にいつも質素でみすばらしく映り、見えるよう心することを学ばねばならないのです。

[N] わたしたちのために身を低めてくださった、我らが尊い主イエスが、恩寵により、完璧な従順の徳を、わたしたちにお与えくださいますように。アーメン。[n]

## 第九章 我らが聖母マリアさまの清めについて

王たちが贈り物を捧げ、前に述べたとおり自分たちの国に帰ってしまった後、尊い全世界の聖母さまは、その粗末な宿で御子イエスと、夫ヨセフとともに、清めの律法を守らなければならない、罪に穢れた一般の女であるかのように、御子イエスは、ただの人であり神ではないかのように、律法に定められた40日の清めの期間が過ぎるのをじっと飼い葉桶の傍らで待っておられました。では、どうしてこのようになさったのでしょうか。まさにわたしたちに範を示すため、まことの従順というものを示すためでした。特別な特権は何ひとつ望まれず、一般の律法を他の人と同じように遵守されたのです<sup>29)</sup>。

---

26) Marginal annotation : nota de perfecta humilitate.

27) Marginal annotation : nota.

28) Marginal annotation : nota.

29) Marginal annotation : nota contra singulares.

しかし一般社会に暮らして、このように振舞う人は多くはありません。特権を望み、それによって他の人よりも偉く、他の人より抜きん出て上であると見られたいと思うものです。しかし、これではまことの従順に到達することはできません。

主の律法に定められた40日の清めの日が来ると、聖母さまは御子イエスとヨセフとともに出立し、ベツレヘムから5、6マイル離れたエルサレムへと向かいました。主の律法に書いてあるとおり、御子を神殿で神に示し、捧げるためでした。

ここで、私たちも、敬虔な観想によって、彼らについて行き、心の中で、敬虔な愛で、御子イエスをともに胸に抱きお運びしましょう<sup>30)</sup>。そして、ここで言われ行われたことの全てに心を傾けましょう。それらはとても敬虔なことです。こうして彼らは御子イエスを抱いて、イスラエルの街に入り、神殿の主を、神の神殿にお連れしたのです。神殿の入り口で、彼らは、貧しい者の習慣どおり、山鳩か何かの鳩を2羽、御子のために生贄として買い求めました。ですから福音書は、彼らが大変貧しい人々の仲間であったことを示すために、豊かな者の一般的な捧げ物であった子羊について触れていないのです。そしてここに、正しい人シメオンが、聖霊に心を導かれて神殿に入ってきました。聖霊のお告げと、応えによって長年待ち望んでいたもの、神の子キリストを見るためでした。そして、境内に入り、キリストを見るやいなや、すぐに、予言の霊によって御子がわかり、跪くと、母の胸に抱かれた御子を敬虔に讃え、拝みました。そして御子は彼を祝福し、母を見て、彼の方に顔を傾け、そちらに行きたいということを示したので、マリアさまは、御子の気持ちを察して不思議に思いながらも、御子をシメオンのもとにお連れしました。シメオンは大いに喜び、恭しく幼子を腕に抱き、立ち上がると、晴れやかに神を讃えてこう言いました。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。云々」(ルカ、2：29—30)

この後シメオンは、御子の受難と、[N] その時の、剣のように母の心を刺し貫き、傷つける悲しみを予言しました。(ルカ、2：34—35) [n]

この時また、預言者である、立派な寡婦アンナが神殿で御子に近づいて来て、御子を讃え、彼女もまた御子について予言をし、御子によって人類にもたらされる救済について語りました。母はこれらの言葉に驚きましたが、賢明にも密かに心の中にしまいこんだのです。やがて御子イエスが母の方に腕を伸ばしましたので、御子は母の胸に戻り、それから彼らは御子とともに、言わば行列を組んで祭壇へと進みました。今日全ての聖教会で、この日に [N] 灯りを掲げて神の祭壇へと [n] 行進するのは、その行列を模しているのです。その時の彼

---

30) Marginal annotation : Contemplatio.

らの順番はこのようでした。まず、ふたりの偉大な老人、ヨセフとシメオンが先頭に立ち、喜びに満ち、互いに手を取り合って、高らかにこのように歌いあげながら行きました。

「神よ、神殿にあってわたしたちは [N] 今日あなたの慈しみを受け取りました [n]。賛美と [N] 愛は [n] 御名と共に地の果てに及ぶ。」(詩篇、47:10)

その後を、聖母、処女<sup>おとめ</sup>マリアさまが天の王イエスを抱いて進み、傍らを、尊敬すべき寡婦アンナが、神に愛と賛美を捧げつつ、恐れ入って口にできない喜びに満ちて歩きました。

ごく少人数であったとはいえ荘厳で立派な行列で、偉大なことを予示し、象徴しています。そこには人類の全ての階層の代表、つまり男と女、老人と若者、処女と寡婦とが表されているからです。

さらに彼らが神殿の祭壇に着くと、母は恭しく跪いて愛しい息子を天の神に捧げ、このように言いました<sup>31)</sup>。

「いと高き天の父よ、ご自身の愛しいお子を今お受け取りください。その母の第一子として、主の律法に従い、今ここにあなたに捧げます。しかし、善き父よ、どうかお子をわたしにお返してください。」

そう言うと聖母さまは立ち上がり、御子を抱き上げて祭壇にのせました。

ああ、主よ、これはどんな捧げ物であったのでしょうか。いやまさに、この世が始まって以来このような捧げ物がされたことは他になく、また、世界の終わりまでないでしょう。

さあここで、御子イエスが祭壇に座っておられるお姿をよく想像してみましょう。一般の民の他の子のように、そして愛らしいお顔に真剣なまなざしで、愛する母とそこに居合わせた人々を見上げて見つめ、我慢強くおとなしく、次にみなが彼をどうするのか待っておられました。そこへ神殿の祭司が連れてこられ、全世界の主である御子は、やはり律法に従い、他の子と同様に、一種の通貨、シケルと呼ばれる銀貨5枚で召使として買い戻されたのです。ヨセフがそのお金を御子のために払うと、聖母さまは大切な息子を喜んで抱き上げ、それから前述の鳩をヨセフから受け取り、跪き、天を見上げて、恭しく鳩を天に差し上げ、このように言って神に捧げました。

「全能の慈しみ深き天の父よ、このささやかな贈り物、捧げ物、初めての贈り物をお受け取りください。あなたの幼子が今日、つつましい清貧の中から御前に献じます。」

ここで御子イエスもその鳩に手を添えて天を見上げ、お言葉は発せられませんが、敬虔な面差しで母と共に捧げ物をする意思表示をされ、祭壇に鳩を置かれました。

さあここで、このように捧げ物をした二人、つまりその母と息子が誰なのか良く考えてく

---

31) Marginal annotation : nota oblationem Jesu.



ださい。非常にささやかな捧げ物でしたが、それが拒絶されることなどありえるでしょうか。いいえ、神よ禁じたまえ。その捧げ物は天使たちによって天の宮廷へと献げられて、そこで天の父がこれを喜んで受け取り、尊い天の面々がこぞって喜びに沸き返ったのです。

この儀式が終了し、御子についてご誕生からこれまでの出来事を記した書物全てに書いてあるとおり、律法に定められたことを果たしたので、聖母さまは御子と夫ヨセフとともにエルサレムの町からナザレの自分たちの町に帰って行きました。

しかし、マリアさまは、途中で従姉のエリザベトを訪ねました<sup>32)</sup>。特別な愛情を寄せていた、その子ヨハネに会うためでもありました。彼らは再会すると、大変喜び、特にエリザベトは、尊い御子の姿を見て喜びました。この方が母の胎内に入られた時、その力で胎内のヨハネが喜び、またエリザベト自身も聖霊で満たされたのでした。

イエスとヨハネの二人の子供も、引き合わされると、互いに愛情深く、微笑みながらくちづけを交わし、はしゃぎました。とはいえヨハネは、彼の主を良く心得ていたので、常にイエスに対して崇敬に近い振る舞いを通しました。

そして、そこに何日か休息した後、御子を抱かれた聖母さまとヨセフは、我が家と休息の待つナザレへの旅を続けました。[N] しかし、後で述べるように、そこに休息は待っていませんでした。[n]

さて、以上の次第と、そして彼らが自分たちの家を離れて、大変貧しく質素に、いかに長い間暮らしたかという点によく注意を払うなら、当然同情の心がわきあがってくるはずです。そして、彼らの例に倣って、彼らの粗末な住まいに、貧弱な捧げ物に、そして律法を守ったことに如実に現れている、従順、清貧、謙遜を学びましょう。

[N] また、世俗の人々は、聖誕祭から御潔めの聖燭際までのクリスマスの期間、身体を使って浮かれ騒ぎますが、敬虔な霊的生活をする者たちは皆、この時期、魂において、敬虔に霊的な祝祭をあげるべきです<sup>33)</sup>。尊い御子イエスと、その母マリアさまを崇め、讃え、最低その日のうちに一度は、観想と敬虔な祈りによって彼らを訪ないましょう<sup>34)</sup>。心に描く聖母さまは飼い葉桶に寝ている御子の傍らにおられます。しっかりと彼らの従順、清貧、謙遜を、書かれているとおりに心に刻み、これを愛し、立派に守って実践してください。アーメン [n]

以上で、月曜日の観想のための、本書第一部を終わります。

---

32) Marginal annotation : nota de visitacione Elizabet & Johannis.

33) Marginal annotation : Nota de tempore Natiuitatis domini.

34) Marginal annotation : nota deuotam obseruacionem.